

オリンピックが終わって何だか気が抜けた。

アテネでは2泊とも野宿だったし、放浪レポートはオリンピック編で3本も書いたので、何だかんだと寝不足だった。

だから、10ユーロ(1380円)という宿の安さも手伝って、このパトラスの宿に長逗留することになったのだった。

パトラスの宿

実は、クロアチアで2度会ったスイス人のブルーノが数日遅れて宿にやってきた。

彼はクロアチア セルビア・モンテネグロ アルバニア ギリシャ トルコというルートで自転車で旅をする予定だったのだが、クロアチアでパスポートを無くし、セルビアに入れず、ちょっと遅れて私と同じルートでパトラスに着いたのだった。

しかし、パスポートが無いままギリシャまで来ちゃうなんて、ヨーロッパ人なんだなあ。私なら、右往左往しちゃうのに。



スイス人チャリダーブルーノ。クロアチア、ギリシャ、トルコを旅している。彼とはよく飲んだ。

彼とは妙に気が合う。もうクロアチアを離れて何日も経つのに、『いやークロアチアはたいへんだったね、一息いれようか』と毎日毎日宿で飲んだくれていたのだった。毎日おごりあって慰労する二人。

ブルーノはスイスに残した奥さんに毎日電話する。どうもブルーノが毎日飲んだくれてるのは私のせいになっている雰囲気だ…。さらに『今は仕方ないけど、家に帰ってきたらそんなに飲んじゃ駄目』と奥さんのお達しがあったそうだ。ブルーノの家には遊びに行きにくいなあ。

6人部屋には、もう一人長逗留の人がいる。チュニジア人のサミー。彼は現在パリに住んでいて、パトラスには友達を尋ねに来たらしい。

私、ブルーノ、サミーの3人で、たわいのない話をよくした。サミーはイスラム教徒なので酒を飲まないがノリのいい、親切なやつだ。

ブルーノはスイス人らしく、ドイツ語、フランス語、英語が話せる(因みに、スイスで話されているドイツ語と、ドイツで話されているドイツ語は結構違うそうだ。通じないこともあるらしい。ブルーノは両方話せる)。

サミーはフランス語。だから私とサミーの会話はブルーノが通訳する。それでも十分3人で盛り上がるから気は心だ(そう書きながら、ブルーノがいなくなると、身振り手振りですごくもどかしくなる二人。やっぱり言葉って大切だ)。

パトラスは港町で乗換駅の様なところだから、旅行者が毎日入れ替わりする。ある時はフランス人、ある時はイギリス人が来て、その旅に部屋を支配する言語が決定する。そしてブルーノだけはいつも大忙しだった。

宿に来るのは旅行者だけではない。例えば楽器を抱えたロマ(ジプシー)の老人が泊まっていた。彼はランチと、ディナーの時間になると外出していた。

そして何故かこの宿にはセネガル人がたくさんいる。セネガルの工芸品をヨーロッパに売り歩く拠点にしているようだ。

ホステルの庭で、どこから調達したのか木片を彫り始めちゃうところがすごい。

これをメード・イン・セネガルとして売るなんてさらにすごい。さすがダカールラリーの国である(って関係ないか)。

夜中 1 時半。同室のセネガル人がいきなりお祈りを始めた。そう言えばセネガルはイスラムの国だ。2メートル四方の敷物を部屋一杯に広げ、立ったり座ったり、数珠みたいなものの玉を数えたり。これが 15 分くらい続く。

しかし真夜中にぶつぶつ言いながら、時々ちゃんとした声を出しながらお祈りするってのは異教徒にとってどうかなあ(思いっきり起きたぞ)。

そして時々あくびをしながら呪文を唱えるのは、イスラム教徒にとってどうかなあ(同じくイスラム教徒のサミーが笑っていた)。この儀式は予想通り、早朝も行われるのだった。

『お祈りは神聖なものだから、異教徒には見せないものだ』と昔インドネシア人から教わっていた。でもセネガル人はあまり気にしないみたい。

それどころか、『さあ時間だ、一緒に唱えよう』という勢いで声に出すので驚く。

いつも起きちゃうので、じっくり観察させてもらった。さすがに写真は撮っていないけど。

イギリスなまりの英語を話す若者とテレビを見ていて、100メートルリレーでイギリスがアメリカを押さえて金メダルを取ったので、『Congratulations!』と言うと、同時に『Shit!』と憤慨している。

彼はアイルランド人だったのだ。アイルランドはイギリスが大嫌いなんだと。

しかし、世の中いろいろあるなあ。

ギリシャの食べ物

パトラスに長いこといて、ある法則に気づいた。それは飲み物 4 倍、食べ物 8 倍の法則。

ビールはスーパーで買えば、0.7 ユーロ(97 円)なのにレストランでは 3 ユーロ(414 円)もする。

ワインもしかり(もちろん私が行くくらいの、安レストランでの話)。

週一回開かれる街の市場に行ってみて、その原材料の安さにびっくり。やっぱりギリシャは物価の安い国だと思い直したが、やっぱりレストランに入ると異常に高い。

何と言っても、マクドナルドでハンバーガー 1 個が 1.4 ユーロ(193 円)の国なのだ。これは、フィンランド、ドイツ、イタリアよりも高く、ギリシャという国の経済状態を考えると異常である(因みに、味も大きさもごくごく普通)。

まるで、ドルを基軸通貨としたからもう安心だ、と言わんばかりの小国パラオの様である。

ブルーノ、サミーと共にイタリアンレストランに行く。レストランやパブには、ことごとく新しいテレビが備わっている。みんなオリンピック用だ。この日はクロアチア対ドイツのハンドボール決勝。クロアチアの勝ち。さすがに普段坂道で足腰を鍛えただけあるなあ。

まあ、それはいいとして、私が頼んだのは、ペペロンチーノとキャベツのサラダ。

しかし麺はのびのび。ガーリックはほどんどきいていない、オリーブオイルは使ったの？ という程度の代物で食べてもんじゃない。小田急線登戸駅で食べる素うどんの方が 100 倍うまい(因みに値段は3分の1)。

一方キャベツのサラダは、キャベツの粗い千切りに、たぶん微妙にオリーブオイルが掛かっているだけ(もしかすると水かも)。

これはキャベツサラダじゃなくて“キャベツ”だろ。

全く信じられない。これで 2.8 ユーロ(386 円)だ。ガイドブックによれば、『ギリシャは素材で勝負。濃いソースなど必要無いくらいフレッシュで美味しいものが食べられる』と書いてある。

このキャベツ、確かにフレッシュかもしれないが、素材で勝負？ それは違うよ。

いや待てよ、この文章を書いた人も、同じ体験をしたのかも。

『ギリシャの料理は工夫せずに素材を出すだけ』なんて書けないもんなあ。

一方、サミーが頼んだトマトサラダも、4分の1にトマトを切っただけ。もっと簡単。同じく 2.8 ユーロ(386 円)。これはトマトサラダじゃなくてトマトだろ。ト・マ・ト。

サミーも、ブルーノもびっくりで、店を出てから大笑い。写真に撮ればよかった。

因みに、キャベツもトマトも市場ではとても安い。こんなものを出されて、ギリシャにやってきたイタリア人観光客は憤慨しないのだろうか？

因みに、スイス人、チュニジア人、日本人は憤慨しているけど。

せめて、ミックスサラダにすればよかった。ギリシャまで来て、毛虫になった気分にならずにすむ。あまりにひどいので、横にとんかつがのっていると思像してキャベツは全部食べてやった。

帰りに、ワインとオリーブとピクルスをスーパーで買って帰る。スイス人のブルーノは、キュウリを生で食べるよりはピクルスで食べる事の方が多いと言っていた。へえー、そうなんだ。

一方サミーは、こんなもの、初めて食べる、チュニジアには売ってない、と珍しがっている。そうだったかなあ。チュニジアにもピクルスはあったような気がするけど。

さて、もうすぐトルコである。イスラム圏だ。

別の日に別のレストランに行き、腹一杯ポークを食べる。大きな固まりを炭火焼して、カットされた肉だ。ただ、ここでもやはりそのまんま出てくる。

だから醤油を持って行って使った。一瞬にして豪華料理になる。そして久々の日本の味は美味しい。ザジキというギリシャ料理も頼んでみた。どろっとしたヨーグルトにガーリックたっぷり、野菜がごく少量。ソースとして使うみたいだが、メニューではサラダのコーナーに書かれている。マヨネーズみたい。食べるとガーリックの為かスパイシーでちょっと辛い。

ギリシャ人曰く、『デートの前は、ザジキを食べちゃいけないよ』とのアドバイス。なるほどすごい料理だからな。しょうがない、今日ぐらいはデートを諦めるか(因みに、諦めても、諦めきれなくても、毎日結果は同じである)。

ギリシャからトルコへの道

ギリシャからトルコへ行くにはバスか列車という旅行者が多いが、私は何となくフェリーで渡って見たかった。

フェリーを使ってトルコに行くには3つのメジャーなルートがある。何れもアテネ郊外のピレウスという港から

- (1)ヒオス島
- (2)サモス島
- (3)コス島

を經由してトルコの港へ入る。この3つの島は、いずれもトルコからわずか数キロというところにあって、こんなトルコ近海の島をぶん取っているなんてギリシャってすごい、と思うほど首都アテネからは遠い。

(2)サモス島は、何とあの【三平方の定理】を生み出した大数学者ピタゴラスの出身地である。

一方、(3)コス島は、【医学の父】ヒポクラテスの出身地である。

化学専攻の私としては、両方とも微妙な距離にあって、実に悩ましい。ピタゴラスがいなかったら三角定規はこの世になかったかもしれないし、ヒポクラテスがいなかったら巡り巡ってキンカンがこの世になかったかもしれない(因みに、ギリシャの蚊は世界一強力だ)。

う~ん、実に悩ましい。いっそのこと(1)ヒオス島にするか、というアイデアもなくはないが、やっぱり(3)コス島にした。

決め手は温泉である。

インフォメーションで何気なく観光パンフレットの写真を見ていたら、わずか1行だけ、さりげなく hot springs and spa という文字が目飛び込んでくるのではないか。それがコス島だったのである。

調べたところ、ギリシャの温泉は、750ヶ所以上あるそうだ。しかし温泉地として利用されているのは32ヶ所。年間800万人以上の観光客がくるのに、温泉の利用者は18万人程度だそうだ。エーゲ海に浮かぶ島のエディプソスという温泉はいろいろなガイドブックに載っているが、この温泉は地球の歩き方にもロンプラにも載っていないみたいだ。



コス島へ

アテネの先、ピレウスという港に行く為にパトラス駅に行く。自転車を乗せていい列車は、1日に一本だけだった。ギリシャよお前もか。

自転車用の切符を買う。あれこれ書類を作った末に、自転車分の請求は何と 1 ユーロ(138 円)。だったら仰々しく手間を掛けずに思い切ってただにしちゃえばいいのに。まるで社会主義だなあ。そして悪しきギリシャ国鉄。小一時間も遅れてピレウスに着いた。民営化しちゃえばいいのになあ。列車は汚くて古いし、鈍行はクーラーがない。そうそう、オリンピック編のレポートで、“電車”って書いてしまったが、この路線は電化さえされていないのだった。

確かギリシャって国は、ソ連/スターリンとイギリス/チャーチルの間で線引きが行われ、資本主義国側に入った国のはず(ブルガリア&ユーゴスラビアは社会主義国になった)。でも何だか社会主義みみたいな非効率な部分や駄目なところがいっぱいあるぞ。

一方、フェリーはすごい。ピレウスからコスという島へ出るフェリーは、またしても豪華な船で、エスカレーターで 2 フロア上がる。全部で 9 フロア。

デッキで、フラットになるビーチチェアを確保。これはかなりいいぞ。クロアチアフェリーの悪夢だけは避けたかったが、今回は格段の違いだ。ふっふっふっ、ギリシャ人たちよ、今日は通路に寝てもらおう。

と、思いながらレストランに行ったら、みんなそこにいた。そのひどい席の確保をされていてびっくり。日本人だったらここまでやらないってほどのずうずうしさ。まだ夕食ってのに、完全に寝ることを前提として、6 人掛けのソファに、たくさんのカップル達が一組ずつ占領してやがる。おかげでレストランもラウンジも満席。

こんなモラルのない事でいいのかギリシャ人。

できれば参加したかったぞ！ しかもカップルなんてうらやましいぞ！ 休暇だからってレストランのソファでいちゃいちゃするな！

汗で体がべとべとだったので、シャワーを浴びた。石鹸もあって、水は海水じゃないし、実に気持ちが良い。シャワー上がりに売店でワインを注文する。出してきたのは白ワイン、と思ったら味が全然変だ。腐っている訳じゃないみたいだけど。

『これ一体何？』とフェリーのスタッフに聞くと、レッツィーナというワインみたいなもので、ギリシャの伝統的な飲み物だという。

表示には pine resin が入っているワインと書いてある。

松脂なんて味わったことがないから良く分からないが、白ワインにレモンと生姜汁を入れるとこんな感じになるんじゃないかなあ。いずれにしても、飲みなれない人にはあまり美味しい飲み物ではないと思うけど。

ワインを注文して、何の説明もなくこのレッツィーナが出てくるという事は、それだけギリシャではきっとメジャーな飲み物なんだろう。そしてこのフェリーは、これまでクロアチア~イタリア~ギリシャと乗った 2 つの国際フェリーとは違い、国内線なんだなあと妙に納得した。

フェリーは朝 6 時ごろコス島へ着く。

まだ真っ暗だったが港をチャリチャリしているとだんだんと明るくなってきた。ビーチ沿いのホテルでは、朝まで飲んだくれていた人たちがいた。楽しそう。どの国も一緒だな。

まずは朝食、と思いピザ屋に入るとチツチャイやつが、2.5 ユーロ(345 円)もするではないか。3つぐらい食べちゃいそうなので諦めて店を出た。24 時間営業だからって高すぎるよ。吉野屋よ来てくれ。

結局朝食を食べずにアスクレピオスの遺跡を目指す。

アスクレピオスとはギリシャ神話で医術の神らしい。

そしてここは、ヒポクラテス(Hippocrates)が作った病院兼医学学校でなのである。BC5~4 世紀のものだ。

ヒポクラテスはここで、人々に医学を説き、治療し、医学の研究と教育をしたという。



コス島の中心部と、海が見渡せる。さらにその向こうはトルコが見える。とても眺めがいい。

シエスタをするギリシャの朝は早い。この遺跡も 8 時開園。街からのバスはまだ来ないので誰もいない早朝の遺跡をじっくり見る、と書いておくが、実は遺跡の上で朝寝する(気持ちいいんだ、これが)。

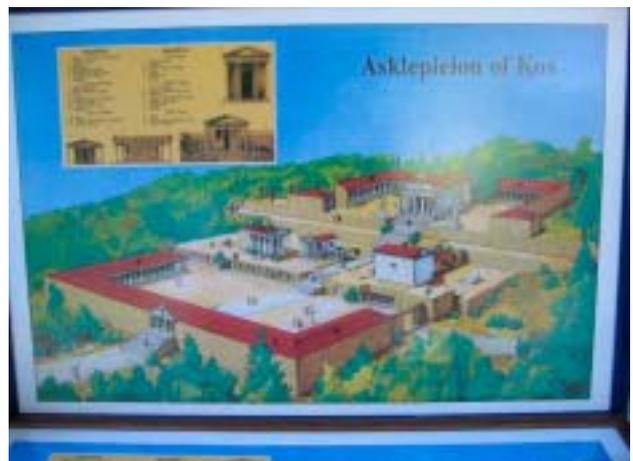
この遺跡は山の中腹にあって、景色が抜群にいい(だから自転車で行くととても辛い)。

敷地からは湧き水も出ていた。

2500 年前の病人もきっとここで癒されたに違いない。

あまり遺跡好きじゃない私でも、ここではヒポクラテスの活動が想像できるようで、何だか楽しい。

お土産屋さんで写真入りの解説書を買おうと思ったが、やっぱりユーロ圏、高くて買えない。デジカメで撮影させてもらった。



アスクレピオス遺跡のかつての様子。山の中腹の為、3段になっている。一番上が神殿。

アスクレピオスの遺跡の帰りにも、通りにはローマ時代の遺跡が数多くある。多くは無料。柵なんてないところもある。

しかし、こんな遺跡がごろごろ出てきたら、発掘と維持にかかるお金はすごいだろうな。

温泉へ

島のインフォメーションで、温泉がある Therma という街で泊まりたい、と言うと、そこには宿泊施設なんてないよ、と言う。いったいそれはどんなところなんだろう。パトラスからはるばるやって来たが失敗だったのか???

仕方なく中心街で宿を探し、とりあえず自転車で温泉へ出発。中心街から温泉までは 10 キロらしい。

たどり着いた場所は、確かに何も無い場所だった。一応小さいながらビーチはある。その先に温泉。何と海中温泉なのだった。

ビーチ、といっても砂利の浜辺だが、その幅は十数メートル程度であとは絶壁の崖という場所。巨大な岩の裂け目から出てきたと思われる温泉が、一ヶ所から流れ出て海に注いでいる。辺りは硫黄の臭い。

源泉のお湯をなめると猛烈に塩辛かった。海の水よりもしょっぱい。温度は 47 度くらい。海水で適温になっている海の一ヶ所にみんな嬉しそうに固まって温まっている。

産湯量は割と豊富で、源泉から流れる川は、幅 1 メートルくらいになって海に注いでいる。でもこれだけ波があると、海の中はもっと冷たいはず、と思っていたら、海底からも湧き出ているようだった。気体もポコポコ至る所から出ている。

青い空、青い海。気持ちいいなあ。海水パンツ、脱いじゃおうかなあ。トップレスの女性もいることだしなあ。

でもトルコが近いだけに、イスラム教徒の人もいるみたいだしなあ、などと自問自答しながらも、さすがに一ヶ所に人が多すぎるのでやめた。

日本人は、この島の近くのロードス島には行くが、このコス島にはほとんど来ないらしい。この温泉、なかなかお勧め。日本のリゾート会社が目を付けそうな場所なんだけど。

つづく



温泉が流れてくるエリア以外はエーゲ海の水が冷たく感じる。だから結構混雑している。



温泉が出てくるところが最も熱い。みんな思い思いの温度の場所できつろいでいる。